

## 広西の脱出

### 独混第八十八旅団通信隊

山梨県 青柳 東海

私の兄は現役兵として、昭和十三（一九三八）年に甲府連隊に入隊、上海事変に従軍して除隊、昭和十八年には再召集により中支徐州付近の鉄道警備に勤務して昭和二十一年一月に復員しました。弟は昭和十九年に日川中学卒業と同時に甲府連隊に現役で入営し、北支鄭州付近にあった高射砲部隊に従軍、昭和二十一年復員しました。当時、唐柏部落では十人程の戦死があつたのですが、青柳家では三人とも無事復員しました。神仏のご加護の賜物と感謝致しておりました。

境川の岡家より婿入りして、東八、豊富小学校長などをしておりました父は、四十二歳で没しました。当時まだ五歳だった私は、父の記憶はあまりありませんでした。

務しておりました。

当時、中央大学在学のため徴兵検査が延期されていた中で、国家総動員令により昭和十七年一月、各大学所在地の市役所において臨時徴兵検査が実施され、私は第二乙種合格、補充兵役となりました。

昭和十七年六月十四日、召集令状により東部第八十八連隊（相模原）に入営、軍服、装備など受領して一週間後には同部隊を出発して、宇品港まで直行して乗船、玄界灘経由で上海着、上海の兵站宿舎にて待機、漢口行乗船待ちをして、六月下旬に漢口に着きました。

配属された部隊は呂第五五九部隊（野戦電信九中隊、中隊長橋本中尉）で、以降十一軍の通信隊長斎藤勇大佐（電信十三連隊長を兼務）の指揮下に入りました。

第十一軍通信隊の教育隊にて初年兵教育と並行して幹候教育を受け、良好な成績を得ましたが、猛暑と栄養失調に加えマラリヤに感染し、漢口陸

当時の生活様式は、父は教員、母も代用教員などしたために、農業は余りせず、屋敷の回りを残した以外の田畑は村の人の小作に出していました。父の没後、子供たちの成長に伴って屋敷一帯を果樹園に転換し、ブドウ、梨、なす、瓜、トマトなどを栽培しており、私達はよく手伝わされたものでした。

また母は副業として養鶏（五百羽）も始め、子供の学費など稼いでいてくれたのだと思います。男兄弟が出征後は、主として母と妹が家を守っていました。

私は、昭和二年四月に富士見小学校に入学、昭和八年三月に同校を卒業して、市立甲府商業学校に入学しました。昭和十三年三月には同校を卒業し、翌年の四月には中央大学専門部経済学科（夜間部）入学、学徒動員による繰り上げ卒業で昭和十六年十二月に卒業となりました。

また昭和十三年三月、甲府商業学校を卒業してから軍隊に入るまで、東京電灯（株）小松川支社に勤

軍病院に約二カ月入院しました。隊長の薦めにより幹候は断念、以後は中隊本部にて庶務、功績、人事など隊長補佐となり勤務しました。

昭和十八年二月～五月、江南作戦、江北作戦があり、いずれも揚子江及び洞庭湖周辺の中国正規軍を補足して殲滅の作戦であった。十一軍（軍司令官横山勇中将）精鋭三個師団をもって多大な戦果を挙げ、私は留守部隊に残り、初年兵教育、本隊との連絡、浙贛作戦派遣兵の収容などに従事しました。

その後の主要な参加作戦は、

昭和十八年十月～十二月、常德作戦参加：第十一軍五個師団（三、十三、三十九、六十八、百十六各師団）に参加、軍通信隊として主として第三師団、第百十六師団に追随協力しました。

経路、漢口↓沙市↓揚子江渡河↓（敵地）↓豊県↓臨豊↓常德陥落（反転）↓玩江↓臨豊↓以下往路と同じです。

従軍中特に感じたことは、敵の遺棄死体が散乱

したこと、米機の空襲の激増、最前線の慰安所など、驚くことが多かったです。

次に昭和十九年五月〜八月には、湘桂作戦（前期）参加（漢口↓長沙↓衡陽）。

昭和十九年九月〜十二月には、湘桂作戦（後期）参加（衡陽↓桂林↓柳州）。

日本の古歌「都をば霞と共に立ちしかぞ、秋風ぞ吹く白河の関」と同様な風情でした。

漢口をたつたのが陽春五月、柳州へ着いたのは秋深い十一月、徒歩約千五百キロ、七カ月の大遠征で古歌を思い出させるには十分な環境と季節であった。

日ごとに熾烈となる空襲、長沙付近の地雷原、トーチカと塹壕、橋梁道路の破壊などにより我方の損害も甚大で、中でも、衡陽攻略こそ正に戦史に残る激戦といえると思います。

九月後期作戦が開始され、零陵、全県の占領、続いて桂林、柳州と進撃しました。この地は独特の山容とバナナ繁茂し「よくも遠くへ来たもんだ」

と私は嘆き、戦友達はもう国へは帰れないのではと、しんみり感慨にふけていました。柳州に駐留して前線との通信に従事しました。

昭和二十年四月には戦局は悪化し、第十一軍の主力は上海、満州方面に転用の発令がありました。柳州、桂林の前線は第五十八師団と二個旅団が守備を引き継ぎ、我々軍の通信隊の一部も独混旅団通信隊として、この編成部隊に参加しました。

私の所属の新設兵団（主として第十三、第三十四師団より編成）は、独立混成八十八旅団（秘匿名「冲天」第一七八八九部隊）でした。

主力部隊が転出後は、約半数以下の兵力となり、前線にあった大隊は日夜その敵襲の危機にさらされ、戦力の消耗が甚大となってきました。そして広西からの脱出作戦となったのです。

広西省の桂林付近で、軍主力の撤退を掩護していた我々の兵団は、優勢な中国軍に包囲されつつあり、いよいよ玉砕かとの悲痛な面持ちであった。私達の通信隊は、密かに短波の外国放送を傍受す

る役得があり、深夜にはアルゼンチンやシドニーからのタンゴ、ワルツを聞き、古参兵たちも聞くために寄ってくるのですが、しかし目的はそればかりではなく、米軍の本土上陸やソ連軍の満州侵攻近いと云う重慶放送を、デマ放送とは思いますが、聞き耳を立てている状況でした。

思えば、歓呼の声に送られ、故郷の駅を経ってから既に三年を過ぎ、猛暑の漢口での初年兵教育、洞庭湖周辺での幾度かの掃討作戦、その間の戦友の戦死があり、比較的弱兵の私が、なおこの中支の最果ての地で元気で軍務についているのが不思議にさえ思えるのです。

その夜、撤退命令があり、極秘裡に通信諸施設を破壊し、暗号書も焼却しました。私物はすべて捨て、握り飯を雑嚢に詰め込むと、折からの小雨を突いて軍公路へと道を急ぐのですが、早くも遠くで敵か味方か不明の銃声がします。片側の丘から元気な一団が降りて来ました。現役の工兵隊だけあって頼もしい限りです。しかし軍公路へ出て

私は驚きました。まるでお祭り騒ぎのような混雑です。とくに山峡の隘路へ各部隊が次々に合流してくるので身動きも出来ない。おまけに一時止んでいた雨が降り出し、道は泥濘化して足は思うように進まない。道に捨てられた鉄兜や背嚢に足を取られる。泥の中で助けを呼ぶ者、路傍で力尽きて横たわっている者……、しかし手を差し延べる者はいない、という混乱ぶりで、皆我が身を守るのに精一杯の状況なのです。

思えばこの公路は、今は反対に敵に追われて我々は逃げているのですが、一年前、敵を追撃して来た道なのです。正にそれは運命の悪戯と云う外ありません。

敵はこの混乱を狙っていたのか、左方の山腹から公路の隘路に向かって手当たり次第撃ってくる。片側の斜面からも迫撃弾が赤い尾を引きながら落ちてくる。それに反発するように後から友軍の重機が唸り出します。この重厚な重機の音を聞くだけでも頼もしい限りでした。

その時、どやどやと人をかき分けて歩兵の一団が後方へ駆けて行く。後尾が危ないのか、そんなことを思うと、急に敵が迫っているように感じます。

とにかくこの隘路は早く抜けなければならぬと思いつつ、闇の中で私達は互いに声を掛け合いながら先を急ぎました。

路端に昨年通過の際、見覚えのある大きな廃屋が在りました。中では衛生兵が慌ただしく動いている。臨時の野戦病院であろうか、消毒薬の臭いが漂い、緊張感を高めていました。

疲れと空腹でもすれば睡魔が襲ってくる。眠ればおしまいだと、互いに肩を叩き合う。脱輪した車両が捨ててあり、運転台に人がいる。眠っているのか、それとも死んでいるのであろうか、それを横目で見ながらひたすら疲れきった足を運ぶ。また後方で激しい銃声が響き、時々弾が頭上を掠める。咄嗟に頭が下がるのも身に着いた習慣というものであろうと。

班の私は命ぜられて同行しました。「何か急用でもあったのですか、また作戦でも？」と私は隊長に尋ねました。隊長は「俺にもさっぱり分からん。でも召集が生電できたからなア：」「ええ、生電ですか」と私は驚いた。

有線、無線とも作戦中は暗号使用が絶対の義務である。兵団内の連絡でも生電とは正に驚きでした。司令部も何かよほど混乱があったのだらうと思っただけです。うつすらと老木の生い茂る中に司令部が在り、将校連が慌ただしく動き回っているのを見て私は何か異変があったと直感しました。

「おい、戦争は終わったよ！ 全面降伏だ！」それは会議を終えた隊長からの、やや興奮した第一声でした。至急、部隊全員に伝えるようにと言つて、隊長はまた本部へ戻って行きました。私は丸秘の封筒を抱えたまま、ただ啞然とするのみでしたが、どの道をどうやって帰ったのか定かでない。しかし私は洞窟の前に立っていたのです。そして洞窟の中へ飛び込むや否や一生一代の大声で

どのくらい時間が経ったであろうか、いつしか雨もやみ微かに空が白んで、夜目にも辺りが見えるようになりました。そして間もなく溪谷に架かっている古い橋が見えました。広西と湖南の省境である。橋のたもとには完全武装した歩兵の一団が我々の通過を見守ってくれていました。

ああ遂に我々は魔の隘路を突破し、広西から脱出できたのだ。生きて再び友軍の待つ湖南に戻れるのだ。互いに握り合う手と手、泥だらけの顔と顔、その髭ずらを伝わって汗と涙が止めどもなく流れました。

夕闇迫るころ、我々はやっと洞窟を見つけて集結を終えました。だが着くやいなや、皆死んだように倒れ込んだのです。階級もない、上下もない、ただただ横になれればいいのだ、ただ眠ればよいのだ。たちまち広い洞窟は異臭といびきで充滿し、その異様な地下空間は正にこの世のものとは思えなかつたのです。

翌早朝、各隊長に至急集合の命令があり、指揮

叫びました。

「ただいま帰ってきた！ 戦争は終わったぞ、日本は無条件降伏だ！」その直後、洞窟内はバンザイ、バンザイの歓声は嵐となって響きわたり、抱き合う仲間、踊り狂う一団、喜びか悲しみかなげか泣き叫ぶ者、軍歌の大合唱……、洞窟はまさに崩れんばかりの興奮に包まれながら、湖南前線の夜は深々と更けて行くのでした。これが我が部隊の終戦の姿でした。

かくして昭和二十年八月下旬、衡陽に集結、隊長から命を受け傷病者十五人を引率して武昌付近の收容所に先行しました。しかし途中マラリヤにて二人が死亡しました。

九月上旬に武装解除となり、以降は近郊の道路の復旧作業やどぶ掃除の使役に行きました。一日二食（大根入り雑炊を飯ごうの蓋一杯ずつ）で、栄養不良になるもの続出しましたが、收容所では死者は三人くらいだったと言われています。

待つこと十カ月、昭和二十一年五月中旬、復員

## 長沙作戦

愛知県 相羽 鉞 雄

船が来るとのこと、南京經由上海に着き、ここで乗船を待つこと十日間、米艦リバー船にて六月八日に博多港に上陸しました。そして復員となり、解散式を行いました。復員列車で深夜に広島を通過した時、特種爆弾で広島は全滅と聞き仰天しつつ、十日には唐柏の生家に帰ることができました。その時、母と祖母は健在で、私の帰還に歓喜の涙を流して喜んでいました。

私は復員後の昭和二十一年九月、関東配電(株)山梨支店へ勤務、昭和二十二年七月、塩山営業所を最後に定年退職しました。そして引き続き昭和五十二年八月より傍系の東電(株)山梨支社に入社して、昭和六十二年九月まで勤務しました。

私は、大正十三（一九二四）年八月十二日生まれ、現在八十一歳です。戦争体験の労苦をお話致しますが、何分とも昔のことです。苦労したこと、苦しかったことは忘れまして、楽しかったことのみが脳裏によみがえるものです。

私の生まれた所は、遠州灘に面して、西に伊勢湾が在り、東に渥美半島、西に知多半島と海国日本を代表するような地形で、その知多半島の名古屋への付根が「大府」です。

尾張の国は昔から偉人を多く輩出しました。戦国の将、織田信長、木下藤吉郎をはじめとして立派な人間を多く輩出しました。東と西の大会の狭間にあり、踏まれても蹴られても頑張るその「氣迫」の精神が脈々と、伝統のごとくありました。

自宅は農業でして一町五反歩の田と畑を所有し